政治

――人間の人間的利用のために――

内山秀夫

はじめに
一　未来に後ずさりする
二　政治的問題
おわりに

はじめに

出口は分るが入口が見えない。この表現はソ連邦の崩壊によるポスト冷戦世界を望見した際に発せられたものである。しかし、そこには期待や希望が強く織り込まれていたように思える。その期待や希望の内容をここで取りあげる必要はない。なぜなら、社会主義に対する自由主義、ひいては資本主義の優位を歴史が証明したとする、イデオロギー的な評価がそこに歴然としていたからである。こうしたイデオロギー的な勝利宣言は、A・ゲーレンが一九七〇年にすでに指摘していた人間の情況での〝公式信仰〟に適合する形で受理されたのだった。

「今日では、諸々の大事件や大きな状況が、非常に複雑にからみあい、しかも、極めて激しく作用しあっているので、それらは、もはや具体的表象能力によっても、概念的認識によっても、確実には把えられないものになっている。したがって、一般に人は、どうしても、自分自身の意識の背後で、まさに強いられて、抽象的理念やきまり文句、それに、偽りの展望等を発展させざるをえなくなってしまう。というのは、一般に人は、実際、その都度、反応しなければならないから、まさに、こうした事態が、抑圧された様々な感情が難攻不落の公式信仰にかかわっていくプロセスとなる。(1)」

ソ連邦の崩壊もまた〝こうした事態〟の一つにすぎなかったのである。

だが、この〝事態〟は、「いまや古い総決算が新しいドラマ性を獲得する(2)」《野蛮化》(ないし幼稚化)を生みだした点で〝歴史以後〟に歴史の登場をうながしたのだった。「自然は〝文化〟という、その限られた領域における極端な先鋭化をしばしば撤回し、ふたたび、それを包み込んでしまうのである。するとまた、洗練されていない欲情が、かたい塊りとなって現われてくる。おそらく、歴史以後の意識は、こうした状況に合流することになるのではないか。すると、非常に古い、偏狭な、地域同士の対立が、ふたたび現われてくるであろう。実は、この地域同士の対立は、ずっと以前から、大きな歴史によって飼い慣らされてきたのだが、そうした大歴史が背後に後退してしまうと、またふたたび登場してくることになるだろう(3)。」

ソ連邦の崩壊は、戦後世界としての冷戦構造という〝大歴史〟の衰弱ないし消失を意味したがゆえに、改めて〝歴史のはじまり〟を私たちに指示したのだ、と言うべきではないのか。だが、ゲーレンがゴットフリート・ベンによる一九三〇年の展望「果てしなさが、やがてくる世紀の人類感情になるであろう」を取りあげて、その上で「こうした新しい見通しにたいして、実際、われわれは精神的な準備をしているのか」と問い、そこでの〝見通し〟が、「無我夢中になれるような、すばらしい信仰心ももはやなく、開かれた視界もなく、蜃気楼も、はっと息をつまらせるよう

なユートピアもなく、あるのはただ事務処理や日課だけ」[4]を内容とし、しかもそれに無感覚である事態を、《歴史以後の時代》とよんでいた、そのことと〝歴史のはじまり〟は果して意味をもった交叉を可能にするのだろうか。そのためには、「管理や産業の歯車の規則正しい機能にたいして、歴史が、未だなおかろうじて妨害の作用をなし得」ていなければならないのである。

歴史が妨害するのは《果てしなさ》の茫漠に対してである。ゲーレンはポリュビオスを次のように引用する。「われわれ以前の時代では、世界の様々な出来事が、いわば、ばらばらになって散在していた。出来事が、空間的にも、また計画や成果といった時間的な点においても、あちらこちらに分散しており、たがいに関係づけられることもなかった。しかし、この時点から歴史は一つの全体になる。いわば歴史が唯一のものとなる。そうして、イタリアやリビアにおける様々な出来事が、アジアやギリシャのそれと関係づけられるようになり、かくして、一切が、唯一の目標にむかって整理されるようになる。」[5]つまり、歴史はすでに妨害ができなくなっていて、《結末に至る唯一の大きなプロセス》と化してしまっているのではないか。そしてまた、人間のすべてはそうした歴史の完成を助長しているかのようである。その人間の条件をゲーレンは次のように指摘する。

「西ヨーロッパのすべての伝統的世界が、徹底的に破壊され、保護できないものになってしまったのは、もっぱら最近になってはじめておこったことである。あるいは、伝統的世界が、いまもなお存在し続けているようなところでも、現代の大衆社会の仰々しさから逃れることができなくなってしまった。今日では、人間の頭脳も、どこもかしこも室内と同じ温度であるために、もはや絶縁しなくなってしまった半導体のようなものである。[6]」

そうした仰々しい逃れられない大衆社会だからといって、生活基盤にかかわる問題がないというわけではない。ゲーレンは、たとえばエネルギー問題はそれだとする。だが、そこでの問題の性格は、「その修正という意味において

ではなく、その維持という意味において」なのだ、と正しく見抜いている。つまり、そこでの「もはや不可逆なものになっている構造の内部」に《進歩》が設定される問題なのである。言いかえれば、「究極的カテゴリーのなかにまで達するような変化は、ほとんどわれわれの時代の問題とはならない」のであって、「主要な問題はむしろ実際的種類の問題」として浮上する。その点で問題は科学－技術的なものであるにちがいないのであり、だからこそ《進歩》へのチャンスをその問題は内蔵しているのだ。すなわち、「すでに達成されたもの、形づくられたもの、また制度にまでなっているものを長期間維持する」といった意味で《進歩》が想定される。これが産業文化のもつ意味なのだ。それはわれわれの文明を停滞させるにちがいない、とゲーレンは洞察する。

「第一に、これからやってくる大きな政治的発展は、もっぱらただ、未だになお見渡すことができる二者択一だけしか許さない、という意味において。すなわち、外部からわれわれを不意に襲ってくるような野蛮人は、もはや存在しないという意味において。第二に、産業社会の基盤は、すでに世界的規模においてしっかりと定着しているし、そして第三に、精神的領域において、われわれの感激や闘争心を呼びおこすような大召集を期待しても無駄である、という意味において。(7)」

文明の停滞が歴史の終わりを同時に意味したときに、そこに聳立するのが《不変の時の流れ》なのだ、との認識は歴史の空洞を言い当てるだけだし、その空洞はノスタルジーでしか充塡できない。さらには、「個人もまた、自分が獲得した生活経験をもはや自分の周囲の人々に伝えることができないような状況におちいってしまう(8)」とすれば、人間はトータルにその実存性を喪失することになりはしないか。

われわれが遭遇しているのは、こうしたコンテクストの中での飼い慣らされてきた大歴史の退場であり、《野蛮化》の登場であった。それはしかし、「ある限られた時代のみに帰せられる欲求」としての恣意的自由の登場を意味するのかもしれない。そこでは生活経験はさほど重要な位置を占めないし、生きるための知識は各個人がそれぞれで獲得

することが要求されよう。その将来に生きるための知識の要件として、ゲーレンがあげたのは、〝いったい何がまだ動いているのか〟であり、〝いったい何を成果や帰結として予想することができるのか〟であった。

だが、こうした提示にもかかわらず、歴史以後の〝時代としての今〟は確実にゲーレンのいう〝同形化〟を人間に強いている。そして、それを隠蔽し、人間があたかも新しい〝歴史〟を刻印するかの錯覚を与えるような形象を伴って事態を〝進歩〟にむけているかの状況が生まれている。それがグローバリゼーションであり、情報化だとしたら、われわれは依然として人間の帰趨に盲目な同形化としてのコンフォーミズムを強化しているのではないか。

（1）A・ゲーレン「産業社会における知識人のチャンス」、森田侑男訳『洞察――現代社会と知識人』（未来社、一九八八年）所収、四七ページ。
（2）A・ゲーレン「歴史の終りか」、『洞察』所収、二〇七ページ。
（3）同右、二〇八～九ページ。
（4）同右、一九九ページ。
（5）同右、一八三ページ。（傍点＝内山）
（6）同右、一八六ページ。
（7）同右、一九七～八ページ。
（8）同右、二〇〇ページ。

一　未来に後ずさりする

「私たちは技術的進歩の奴隷である」とは、コンピュータおよびコンピュータ言語開発の先駆をつとめたN・ウィーナーの懸念であった。彼はさらに、「進歩は未来に対して新しい可能性を開くだけでなく、新しい制約を課する。

進歩を単純に信ずることは、われわれの強さに属する確信ではなく、黙従に属し、したがって弱さに属するものでしかない」[1]とも警告した。

ウィーナーは徹底的に《機械による支配》をおそれていた。D・バーナムはウィーナーのこの怖れを次のように点綴している。「機械は設計者の限界を超えるものであるが、そうすることによって、効率的であると同時に危険になるかもしれない、というのが私の考えである。」「機械は人間の知能を超えられなくても、任務を遂行するうえではかならず人間をしのぐだろうし、実際にしのいでいる。機械がどのように機能するかを人間が理解できるのは、機械が任務を完了してからのことだろう。私たち人間の行動の遅さのゆえに、機械を管理することは実際にできないかもしれない。」「奴隷は賢く役に立ってほしいと思うが、同時に従順であってほしいと思う。徹底した従順さと真の賢さとは両立しない。古代には、賢いギリシャの哲学者が、あまり賢くないローマ人の奴隷として、主人の意志に従うよりも、むしろその行動を支配したことが幾度あったことだろう。」そして機械が効率性を高め、より高度な心理的レベルで作動するにつれて、「機械による支配という破局が近づいてくる」[2]と。

このウィーナーの怖れは、機械を社会に導入する、そのことがらにかかわっている。あるいは科学技術を社会が受容するポイントで発現する性質のことがらであろう。たとえば、長尾真は科学技術と人間とのかかわりを次のようにとらえる。「科学技術が社会に受け入れられていくか、あるいは社会に対して大きな影響を与えていくかというのは、技術本来の内容ということもありますが、社会の状況、社会全体のメカニズムに大きく依存していることだ。」[3]つまり、N・ウィーナーが、たとえば、「情報とは、われわれが外界に対して自己を調節し、かつその調節行動によって外界に影響を及ぼしてゆくさいに、外界との間で交換されるものの内容を指す言葉である。情報を受けとり利用してゆくことによってこそ、われわれは環境の予知しえぬ変転に対して自己を調節してゆき、そういう環境のなかで効果的に生きてゆくのである」[4]と語るかぎり、それは哲学的思惟であり、理論的思念にとどまる。さらに、「社会という

ものはそれがもつ通報（メッセージ）および通信機関の研究を通じてはじめて理解できるものであることと、これらの通報および通信機関が将来発達するにつれて、人から機械へ、機械から人へ、および機械と機械との間の通報がますます大きな役割を演ずるにちがいない[5]」と認識しても、それは社会観にとどまりうる。

だが、「社会がこの科学技術の開発を受け入れるのか、受け入れないか、という一つの社会的な壁がある[6]」という言説を読むとき、前述したゲーレンの〝歴史の妨害〟のアナロジーとしての〝社会の妨害〟が浮んでくる。その場合、下河辺淳の以下の提示はわれわれに立ちどまる地点を明らかにしている。「科学が開発される方法やシステムというものと技術が開発される考え方やシステムというものが、いままではやはりそうとう違っていたのではないか。科学のほうは……緩やかに緩やかに人間にひとつの知識を提供してきた……。技術のほうは、経済システムの巻き添えを食いますから、もうからなければいけないとか、あるいは売れなければいけないとかいろいろな要素が加わって、どちらかというと、ハングリーな形で開発されていくというような面があったのではないか[7]。」しかし、この知識の増大としての科学と、性急な実利経済的な開発動機に衝迫される技術が直結したときに、歴史は果しなさへ、社会は科学技術の無頓着な受容へと変質したのではないか。

こうした発言がコンピュータとバイオテクノロジーを前提としているかぎり、それはN・ウィーナーがその著書を「人間の非人間的な利用」に対する抗議として世に問い、ことさらに「人間の人間的利用」と副題した真摯さえも共通している[8]。だが、科学と技術が直結したスタイルで提起された成果に対する壁であるはずの社会や社会システムの実質がポスト産業社会として自己形成をしている、つまり科学技術の進歩は人間の進歩であり、科学技術の実現可能性は人間の可能性としてこれを実現すべし、との原理を据えつけているとしたら、社会はテクノ社会として自己維持される。

社会が壁にならず、歴史が妨害しないとき、テクノ社会は情報社会としてみずからを画期する、と言うべきである。

それは社会科学の手を離れて、未来学の対象になるにちがいない。たとえば、E・コーニッシュ（世界未来協会会長）は、増田米二の『情報社会』日本語版に寄せて、「かってない未来を拓く新しい情報・通信システムを手に入れた私たちは、この新しい技術のもつ可能性を注意深く検討し、これを活用して未来のよりよき世界の構築の計画化にとり組む必要がある」[9]とストレートに語っている。また増田自身も、「人類はいま工業社会から情報社会への歴史的大転換期にあるという基本的認識の上に立って、情報社会の将来像を構造的に描き出し、そのような社会がどのようなものになるかを展望する」[10]作業を行っているのである。その作業内容を少しく取りあげてみたい。

増田は未来社会の構図を描く場合に、トレンド的手法と歴史的類推法があるとし、前者は「社会における新しい兆候を集めて分析し、その延長線上に未来社会を構築していくやり方」であり、後者を「過去における人類社会の変革をモデルとして、未来社会を類推的に構築する」手法だとする。前者に依っているのはA・トフラーであり、J・ネイスビッツだと指摘する。なぜなら、トフラーの『第三の波』は、「歴史の変化の本流を見きわめ、それを分析する新しい手法」として、「社会の変化の波がしらの分析」を強調し、「次つぎとうねりを見せる変化の波の連続が歴史であると考え、おのおのの波の力がわれわれをどこへ運ぼうとしているのか、それを見定める」とは言うものの、トフラーの歴史設定が歴史の連続性ではなく、むしろ「歴史の非連続性、断絶と革新」[11]に注目し、「変化の鍵となるパターンを見きわめれば、そうしたパターンに影響力をどのようにでも行使できる」点を指摘する。

J・ネイスビッツにしても、情報化社会は概念ではなく、《現実》なのだ、とする点でトレンド手法に属する、と指摘される。ネイスビッツは「われわれの社会に現在起こりつつある一〇の大きな質的変化」をあげる。この質的変化は「現在から未来を予測する」ことを学ぶ必要をよびおこす。つまり、この「変化は非常に急速に起こっているので、反作用がでる時間がない」ほどなのだから、「われわれは未来を予見して対処していかねばならない」のであり、「それができるようになったとき、時代の趨勢というものは運命ではないと理解できる」[12]のだ、と強調するのである。

『第三の波』にしても『メガトレンド』にしても、〝時代の趨勢〟をとらえたにすぎないのであって、それでは「未来社会の全体的根構図を描きだすことは至難」なのだ、と増田は胸をはる。「こうした手法では、兆候がどんどん進んで最終段階近くにまで至り、ようやく未来社会の全貌が浮かびあがってきたときに、はじめてこれが来るべき未来社会だと説明することしかできない。しかし、それでは遅すぎる。そこでどうしても現在の社会の延長線上で未来社会を描きださざるをえない」のだ。

ここに歴史的類推法の有意性がある、と増田は言う。つまり、「過去における人類社会の変革をモデルにして、これらをパターン化し、そこから社会変革の歴史的法則といったものを導きだし、その歴史的法則にもとづいて、きたるべき未来社会をモデルをつくりあげ、さらにそれをパターン化して、過去の人類社会のパターンに対応させながら、類推的に未来社会を構築していこう」[13]とする方法である。

歴史的法則として増田は、社会的技術法則・段階的社会変革法則・構造的社会変革法則をあげる。社会的技術法則とは、ひとたび社会的技術が出現し、それが人類社会にゆきわたると、古い人類社会が新しい人類社会に根本的変革をとげる、とする内容のものである。段階的社会変革法則は、社会的技術による人類社会の変革は一定の段階をへて行われる、とするものであり、構造的社会変革法則は、人類社会が一定のパターンにしたがって構造的に変革をとげる、とすることを内容とする。

増田が説述したのは歴史発展論であり、その発展の起動因をなにに求めるのか、その上で発展段階をどのように設定するか、そして発展目標をどこにおくか、という論理展開は、すでに唯物史観が、そしてそれに対決するイデオロギーを内蔵したW・W・ロストウの非共産党宣言としての経済成長の諸段階説が、あるいはこれも社会主義への対抗イデオロギーを隠蔽する形をとった、自由主義的近代化史観が提出され、やがて人類史に沈んでいった事実にもかかわらず、またもや現在を《高まりゆく期待の革命》に据えつける、そのオプティミズムにそれは彩られている。その

ことを知ったうえで、増田のヴィジョンをもう少しきいてみることにする。

産業社会から情報社会へ、とする発展段階は、新しい社会技術によって、代替・増幅・変革のプロセスを内在化して、伝統的社会たる産業社会が新しい人類社会に自己変革する予定を示す。そこでの新しい社会技術が《情報》であり、それは前述したN・ウィーナーの「情報」とは〝社会性〟をもつ点でむしろ異質な位相にまで高められている。つまり、《情報の価値の生産と利用を中心として発展する社会》が措定されるかぎりで〝情報〟が成立するのである。言いかえれば、モノに代わる情報である。

その場合、情報を次のように考えることで社会が特徴づけられる。「いままでのテレビや新聞などのいわゆるマスコミ情報ではなく、コンピュータと通信技術の結合によってつくりだされる高度に知的・複合的な情報であり、その本質は、人間の知的労働の代わりを務めるばかりか、それ以上のことをなしとげ、しかも広汎な知的情報ネットワークを形成し、やがて、現在の工業社会を情報社会へと根本的に変革していくことである。そういった性格の情報が大量に生産され、人類社会を維持し発展させる上で最大の価値を発揮する社会が情報社会である。」(14)

社会変革である以上、そこには価値観の変革が伴われるはずである。増田に語らせれば、産業社会における価値基準は〝物的価値〟(生理的欲求の充足)であり、倫理基準は〝基本的人権・博愛〟であり、時代思潮は〝ルネッサンス〟(人間解放の思想)であるのに対して、情報社会にあってはそれぞれ、〝時間的価値〟(目的達成欲求の充足)、〝自己規律・社会的貢献〟、そして〝グローバリズム〟(人間と自然の共生思想)だという。

増田はこの価値観の変革はコペルニクス的だとする。それが意味するのは、《未来時間をクリエートすることによって創りだされる価値》である。さらに説明は次のように進行する。「これからは、私たちの自由に処分できる時間がますます増えていく。それは、オートメーションやロボットの普及に対応したワークシェアリングの導入、さらに遺伝子工学などの進歩による医療技術の飛躍的発展にともなう平均寿命の延長などによって、私たちの自由時間が今

後さらに大幅に増加していくからである。そして、このような自由時間の大幅な、しかも長時間持続する増加によって、自由時間が未来時間にかわり、それがさらに自己実現、つまり、生きがいの追求に大きく変質していく。そして、この未来時間をいかにクリエートしていくか、つまり、自分たちの将来の人生計画を自らデザインし、いかにこれを実現していくかが、私たちの最大の生活目標になってくる。[15]」

こうした未来予測が〝歴史〟につながる接点があるのか。たとえば、自己実現に人生の目標をおくというのは、A・マスローが人間性を論じて、充足すべき五つの基本的欲求のヒエラルヒーの有機体を人間とおいた、そのヒエラルヒーを人間の発達段階としてしまっている粗雑さを示しているだけのことではないか。つまり、㈠生理的欲求、㈡安全の欲求、㈢所属と愛の欲求、㈣承認の欲求、㈤自己実現の欲求が基本的欲求としてあげられたものだが、それらは人間のトータリティを充実するのに〝ベーシックな〟動機づけを明らかにした心理学上の措定であって、その欲求を充足する社会システムをことさらに想定するものではないはずである。[16]

「人間は自分のなりうるものにならねばならない」とするマスローの自己実現命題は、むしろ他の基本的欲求と複合し、ときには他の欲求が優先することでトータリティを保持するのだ、と理解するべきではないだろうか。だから、こうした基本的欲求を堅固なヒエラルヒーとみなし、そのヒエラルヒーを反映する社会を構想するのは、矢張り単線型の発達・発展史に堕ちることになるのである。

〝時間〟をもち込むことで歴史が語れるのか、これが次の問題であろう。この問題に対して未来学はつねに文明論の視座で応じようとする。たとえば、「未来を怖れるがゆえに一生懸命過去へ逃避し、前向きの姿勢も示さず、ただいたずらに自分たちが生を享けた時代の、すでに死にかけている世界を懸命に守ろうとしている[17]」との否定的な指摘は、むしろ《未来に後ずさりする》（P・ヴァレリィ）姿を示しているのではないか。

たしかに、人間の現在から新しいものが生まれる予兆を感受するのは歴史的思考に属する。だが、その予兆はつね

に歴史の香気、つまり、人間がより人間らしく生きることができる、そのような予兆ばかりでないことはいうまでもない。邪悪もまた予兆を示すのである。未来への回帰と訳されているようだが、"Back to the Future"は人間の現実をみつめながら未来に退行してゆく、そうした価値判断を停止した無力感を表現するものである。言いかえれば、「前向き」であるか否かは、《現在》を〝人間〟の名においていかに評価し確定することで、それを連続的に止揚する一点にかかっているのだ。だから、発展段階や類型論では歴史のダイナミクスはとらえられず、飛躍ないし断絶を歴史にもちこむことで、歴史に報復される過去をわれわれは知っているのである。

(1) ノーバート・ウィーナー、鎮目恭夫・池原止戈夫訳『人間機械論』第二版(みすず書房、一九七九年)、四五～六ページ。
(2) デービット・バーナム、田原総一朗訳『コンピュータ国家』(TBSブリタニカ、一九八四年)、一八～九ページ。
(3) 岩波書店編集部編『科学技術の開発と新しい社会』(岩波書店、一九八三年)、一七八ページ。
(4) ウィーナー、前出、一一ページ。
(5) 同右、九～一〇ページ。
(6) 『科学技術の開発と新しい社会』、五九ページ。
(7) 同右、五七ページ。(傍点＝内山)
(8) ウィーナーがなぜ「人間の人間的利用」とあえて明記しなければならなかったのか。訳者が原著第二版で削除された部分を訳載してくれているので、ここで書き写しておく。(削除部分はカギ括弧でくくっておく。)

「私は、生物個体の物理的機能と最近の通信機械のあるものの行動とが、フィードバックを通じてエントロピーを制御しようとする働きにおいて精密に相似していることを主張しようとしているのである。この両者は共に、その行動過程の一段階として感覚受容器をもっている。すなわち、両方とも、外界から低いエネルギー・レベルで情報を集め、それをその個体または機械の行動に役だてるための特殊な装置を備えている。動物の場合も機械の場合も、これらの外からの通報はなまのままで取り込まれるのではなく、その装置の内部の変換機構を通じて取り入れられる。こうして情報が、行動のその後の段階の遂行に利用できる形にかえられ、遂行行動を外界に対して効果的なものにさせる。動物と機械のどちらにおいても、単にそれらがしようとした動作ではなく外界に対し実際に遂行された動作が中央制御装置に報告されてくる。行動のこのような複合は、普通

は人々は気づかないし、とくに従来のありふれた社会分析においては、それが当然演ずる役割を果たしていない。」

「このことは、人間だけについて考えても、あるいは周囲の世界と相互的な関係をもつような型の自動機械（オートマタ）と関連させて考えても、やはり成り立つことである。この点において、われわれの社会観は、多くのファシストや実業界や政界の有力者がいだいている社会理念とは異なる。彼らと似通った権力欲の野心家が科学界や教育界に全く見られないわけではない。かかる人々は、あらゆる命令が上から天降り決してもどってはこないような組織を好む。彼らの支配のもとで、人間は、ある高級な神経系をもつ有機体といわれるものの行動器官のレベルにひき下げられてしまった。」ウィーナー、前出、二一〜二三ページ。

(9) 増田米二『情報社会』（TBSブリタニカ、一九八五年）、二ページ。

(10) 同右、三ページ。

(11) A・トフラー、徳山二郎監、鈴木健次・桜井文雄他訳『第三の波』（日本放送出版協会、一九八〇年）、二四ページ。（傍点＝内山）

(12) J・ネイスビッツ、竹村健一訳『メガトレンド』（三笠書房、一九八二年）、二二〜三ページ。（傍点＝内山）

(13) 増田米二、前出、一七ページ。（傍点＝内山）

(14) 同右、二七ページ。（傍点＝内山）

(15) 同右、三六ページ。

(16) A・マスロー、小口忠彦監訳『人間性の心理学』（産業能率大学出版部、一九七一年）、八九〜一一七ページ参照。

(17) A・トフラー、前出、一八ページ。（傍点＝内山）

二　政治的問題

科学は制度である、とはポスト産業社会の紛れようのないテーゼである。それはさらに科学技術はより堅固な制度であるというより真実なコロラリーを引きだす。未来学が提示する約束された地としての未来には、むしろ人間の生活に、この制度としての科学技術が防ぎようもなく侵略して、機械がみずから好むがままに人間を変化させる構図が

みえてはいないか。マン－マシン・インターフェイスとして認知科学がとりあげる問題は、この機械の侵略に脅えた懸命な人間の防衛ではないのか。

問題をはじめに語ってしまったのだが、私が提示しようとするのは、情報社会を約束の地として設定した未来学が、テクノロジーそしてとりわけ機械について盲目なまでに肯定した、その地点に立ちつくすことではじまる。それは言うまでもなくコンピュータの現前である。その場合、コンピュータ・テクノロジーは、「いままで人類によって発明されたいかなる道具や機械とも本質的にちがっていた。コンピュータ技術のもっとも重要なポイントは、当初から機械みずからが情報をつくりだすことを目的としてつくられたという事実である。コンピュータは記憶、演算、制御という三つの働きをそなえた画期的な知的機械で、これによって人間の情報や知識をつくりだす知的能力が飛躍的に向上した」[1]とする楽観が敷衍した。だからこそ、情報革命は産業革命に匹敵する、あるいはそれ以上の衝撃力を社会に与え、社会を変革させるのだ、さらにはその社会は人間の進歩に属するのだ、と展開されたのである。

こうした能天気的な夢想に対して、現在の論者ははるかに慎重であり、老獪である。たとえば、「産業社会の現状からみて、高度情報化は避けられない現象である。それはこれまで達成した豊かさを維持するために不可欠だともいえる。産業のさらなる効率化を進めないことには、現状維持すらおぼつかないからである。けれども、これが産業社会の抱えている諸問題をクリアして、新たな社会を立ちあげる意義をもっているかというと、どうしても悲観的にならざるをえない。高度情報化の構想は、産業社会の枠組みを超えるものではなく、その延長にすぎないからである。というのもその試みは、社会の効率化と合理化を情報処理の側面で進めることだからである」[2]との指摘は、批判精神が発動し、情報化の現在をよく抑制的に評価している、と受けとることができよう。

だが、とこの論旨は次のように展開する。「重要な点は、高度情報化が触媒となって、効率性や管理の発想には収まりきらない現象が多発することである」[3]と。つまり、「新しい現実」が生まれるのだとして、それは以下のように

説述される。その第一にあげられるのが〝差異〟動機である。つまり、「社会の組み立て原理の焦点が、機能の発想から意味の発想へ移るのと並行して、人間の行為する動機も、機能に対応した〈欠乏動機〉から、意味の発想に対応した〈差異動機〉へと変わる」ことをそれは表わしている。豊かさの実現を目標とした近代社会は、満たされない状態をもって動機づけの根拠にしているがゆえに欠乏動機が支配した社会であった。だからこそ、欠乏状態克服のための効率化・合理化が行為様式になる。だが、行為は生きること生活することの意味追求の側面を重大にもっている。[4]

その場合の行為の意味を特徴づけるのは、個別的な意味追求・意味充実であるがゆえに、それは〝差異化〟としてとらえられる。さらに、この差異化は自己強化されることで意味充実がはかられる。したがって、「差異化を自己強化するメカニズムおよび新たな差異の創造に基づいて既存の意味を再編集するメカニズムが必要である。つまり、差異化の運動が協力しあって、既存の意味（差異）体系に割り込み、みずからの居場所を確保するような自己組織化の運動が求められる。[5]」

第二は付加価値人間だと指摘される。経済活動の中心が付加価値創造になる、つまり、差異が価値となり付加価値を生む、というスタイルになれば、所与の目標を効率的に達成する型の人材から、目的をみずから設定し（アイディア探究型）、既成の規律に拘束されず、自由に発想し付加価値を創造する人材（付加価値人間）を受容し、その活動を保証する組織構造が重大になるのだ。と主張される。

第三は脱管理システムとして提出される。付加価値人間の活動を推進するためには管理的発想は通用しない。その場合、「制御や管理を減らしていくと、ゆらぎが発生する。そのゆらぎのなかから、付加価値やアイディアの創造につながりそうなものを支援するしかない。だからこれからは、管理システムではなく支援システムが必要になる」と今田高俊は言う。そこから、「近代のプロジェクトは、管理の仕組みをこの世界に根づかせてきた。そして、産業社会は、管理社会という異名をとるほど、管理と密接な関係をもってきた。けれども、近代社会のゆくえを想定してみ

るとき、おそらく管理システムはその歴史的使命を終えるに違いない」と今田は展開するのである。

第四にあげられるのは、異質なものの社会編集である。それを今田は「社会をまとめる原理が、合意形成をつうじた〈社会統合〉から相違の〈社会編集〉へと移行すること」と説述する。それは、「意味というのは、エディティング（編集）するものである。意味の領域では、差異の編集が重要なテーマになる。個性的な差異はそのまま残して削らない。そして個々人のいろいろな差異をある観点に基づいて関係づける。編集とは諸差異の関係づけであり、そうすることで、皆が了解し共有できる新しい意味を発生させることが社会編集である」からである。そしてそこでの課題は、「文化的な差異性や個性を前提にしながら、どういう編集をして相互了解可能な新たな意味空間を形成できるか」という世界編集の問題に連結するのだ、と今田は展開する。

今田が構想した社会は「ハイパー・リアリティ」によって出現しうる《世界》から抽出されたものである。その基底にあるのは、「ゆらぎ」、つまり、「既存の発想には収まりきらない、あるいは既存の枠組みでは処理できない現象」の発現であり、「もはや、ゆらぎを望ましくないもの、システムの均衡を保つために制御すべきもの、と決めつけるわけにはいかない」とする状況認識である。

産業社会論からすれば、第一次石油危機を契機として、産業社会は不確実な、したがって「ゆらぎ社会」の様相を呈した。つまり、豊かな社会を形成した産業文明はそれ以後、文明のくいつぶしの過程に入ることで「世紀末現象」を発現した。こうした社会自壊を放置し観察することは許されないのだ。だからこそ、今田は「ゆらぎをつうじた秩序形成という視点から、来たるべき二一世紀の社会像を解読する」責務をみずからに課し、「その際、単にこれまでの産業化の趨勢を延長して考えたり、現在進んでいる高度情報化を将来に外挿するのではなく、近代文明そのものが問いなおしを受けているという、文明的スケールの変化を視野に入れて考察する」[6]必要を強調するのである。

ここまでは前述した野放図な未来学的ユートピアとしての情報社会に対して、十分に批判的でありうる立場の宣明

として傾聴に値する。そして、ここではあえて説明しないけれども、新しい社会編成原理としてあげられている、〈ネットワークにリゾームが絡みついた状態〉が、「電子メディアの発達が、世界をそして人類をまったく新たな段階へ進化させるにちがいない」のだから、「社会の現実は、近代社会が彫琢してきたものとは大きく隔たっていよう」がゆえに、人類の、社会の先ゆきの入口だとされると、それがポストモダン論の典型的言説であるがゆえに立ちどまらざるをえない。たとえ、「ポストモダンの現実は、現状では近代の地平の先に立ちあがった蜃気楼のようなもの」と留保されてもである。なぜなら、「情報技術とバイオテクノロジーの高度化は、われわれをその方向に着実に導きつつあると思う」[7]（傍点＝内山）と続けられるからである。

（1）増田米二『情報社会』（TBSブリタニカ、一九八五年）、六一ページ。（傍点＝内山）
（2）（3）今田高俊編『ハイパー・リアリティの世界』（有斐閣、一九九四年）、一六ページ。
（4）M・ウェーバーが彼の理解社会学で「意味」を、人間行動の「経緯が理解できるかたちで解明しうるような連関や規則性」に求めたことは、今さら言うまでもないかもしれない。だが、コンピュータ科学や情報科学、あるいは認知科学でしばしば取りあげられる〝意味〟の世界が、社会科学者を往々にして立ちどまらせるのは、果してなぜなのだろうか。それは意外と行為の主観的意味を、ポスト近代的に意図的にすくいあげているからではないだろうか。それを照合するために、あえてウェーバーの行論をひいておきたい。それはこうである。「『行為』（意図的な不作為や忍従を含む）とは、われわれにとって常に、『対象』にむけられた理解できる行動、すなわち、たとえ多かれ少なかれ無意識にでも『抱かれ』あるいは『念頭におかれた』何らかの（主観的）意味によって特定されている行動を指す。……理解社会学にとって特に重要な行為は、とりわけ、(1)行為者によって主観的に抱かれた意味の上で他者の行動に関係づけられており、(2)その意味の上での関係づけによっても経過が規定され、したがって、(3)主観的に抱かれたこの意味から理解し、説明することができるような行動である。」M・ウェーバー、海老原明夫・中野敏男訳『理解社会学のカテゴリー』（未来社、一九九〇年）、一三ページ。（傍点＝ウェーバー）
（5）今田高俊、前出、一七ページ。
（6）同右、iページ。（傍点＝内山）

(7) 同右。

おわりに

情報化、高度情報化はすでに既定の事実として——そのコンテクストはさまざまであるにしても——ものごとも、学問・理論も、そして人間も認めてしまったかのようである。佐藤俊樹はそこでの問題性を次のように言い当てている。「現在のコンピュータは、『考える機械』にはまだほどほどに遠い存在である。それにもかかわらず、『人間や社会を侵略するコンピュータ』への恐怖は根強く残っている」のであり、それは「より根深い恐怖の源泉」につながっている。それは「もともと産業社会には社会の変化を最新の科学技術に仮託して語りたがる癖がある。それは産業資本主義がイノベーションを神として崇めていることの裏返し」なのだ。したがって、コンピュータに象徴される現在のイノベーションにしても、われわれが現に経験している社会変化がその因果として過度に単純化されている、と言うべきであろう。かくして、われわれの対象は〝コンピュータ神話〟、すなわち、T・ローザックの表現をかりれば、「コンピュータの力と結びつけている将来の方向性」、そして「この機械の周辺にただよう、力のイメージ、福祉の幻想、そして夢や願望」に対する挑戦でなければならない。

ここでの立脚点は何よりも、「人びとは、情報という言葉で何を意味するのか、また、どうして自分が情報をそんなにも欲しているのかについて明確な考えをもっていないのに、われわれが『情報時代』のなかで暮らしているということを安易に認めがちである。そこでは、周囲にあるすべてのコンピュータを『信仰の時代』の『聖なる十字架』の遺物のようなもの、すなわち、救いの象徴にしている[1]」とする認識である。

コンピュータがこうした「救いの象徴」になりえたのは、それが《普遍言語》への人類の夢想に接近すると唱導さ

れたからである。とりわけ、前述した大歴史以後の各種各様の対立紛争の激発は、コミュニケーションの断絶を意識させた。そこから普遍言語への夢想が強烈に湧出したことはたしかである。コンピュータ、とくにその最先端に位置する人工知能は、コンピュータを計算機械から言語機械に転換しうる幻想を人類に与えた。そのことは、人間の心をもつ機械、あるいは思考する機械の出現を予定するものだった。そこに、「人間の心の状態はすべて何らかの記号によって表わすことができ、心の働きは記号の形式的操作である」[2]とする定義が成立していたことが加わる。

西垣通は普遍言語機械の夢想を以下のように語りあかしている。「〈コミュニケーション〉とは、絶望的な溝をへだてた異なる世界同士をなんとかつなごうとする切ない行為に他ならない。コミュニケーションを成功させるためには、言語コードの使い方を明確かつ厳密に規定すればよい……。人々による言語コードの使い方の揺らぎを抑えこむことで、誤解はなくなり、『正確なコミュニケーション』が実現できる。この方向を推し進めると、言語コードの形式的＝機械的な処理が可能になり、ついには〈普遍言語機械〉にいたる……。コトバの多義性を排除し、なんとかコンピュータの論理で文章を扱えるようにしようという人工知能研究の憑かれたような努力は、まさにこういう普遍言語へのナイーヴな渇望に根ざしている。[3]」

西垣通は、第五世代コンピュータとして知られる国産技術による最新型の人工知能開発をとりあげて論じている。そのプロジェクトは四目標、「高速大規模な問題解決用推論機構の開発」、「高速大規模な知識ベース管理機構の開発」、「知的インターフェイスの開発」、「知的プログラミング技術の開発」を掲げた。そして、第一目標は並列推論技術の開発によって一応の成果をえた。その他の目標についてはほとんど明確な成果はえられなかった。

西垣が言うように、「現代コンピュータ技術の精華、〈知識工学＝人工知能〉にひそむ毒」に気づかなければならない時点に到達しているのではないか。「『思考する機械』とか『心をもつ機械』といったキャッチフレーズのもとに、〝無謬〟のラベルを貼られた言説（ディスクール）がコンピュータから次々に出現し、それらが現代社会で圧倒的な力をふるうとす

れば、たしかに悪魔的な光景にちがいない」からである。

コンピュータ、そして人工知能の光と影と言うことは容易である。西垣が、「今後、九〇年代以降の人工知能研究は、コンピュータ工学の一分野として地道な発展を続けていくだろう。つまりそれはもはや夢の〝人工知能〟ではなく、専門的な〝知識情報処理技術〟として、あくまでも工学の範囲のなかで実質的な有効性をためされながら進んでいくはずである」と正確な洞察を示すとき、それはA・ゲーレンが〝歴史〟を人間の洞察営為に託した点と重大に交叉するにちがいない。

工学の発達は工学を鎖につながねばならぬことを歴史が要求する情景を明らかにしているのである。N・ウィーナーが〝人間の人間的な利用〟を主張したのは、〝人間の非人間的な利用〟を見透していたからである。非人間的な、あるいは反人間的な利用への可能性を徹底的に発見し、それを駆除することがらが、インダストリアル・モダニティに堕ちた〝近代〟の再生のための《政治》ではないのか。コンピュータ文明がポストモダンとして、約束の地を示したかのような錯覚からの覚醒、そして人間的な利用の場としての〝近代〟に一度は還帰し、そこで《政治》を発現することで、ポストモダンを洞察する作業こそが〝歴史〟に値する。機械文明に悪酔いし、その宿酔に苦しんでいる〝現在〟は、すでに覚醒への予兆を示しているのである。

(1) T・ローザック、成定薫・荒井克弘訳『コンピュータの神話学』(朝日新聞社、一九八九年)、四～五ページ。
(2) 西垣通『ペシュミスティック・サイボーグ』(青土社、一九九四年)、二五～六ページ。
(3) 同右、二六八ページ。(傍点＝内山)

[追記] 本稿は私を研究代表者とする桜田会の研究助成による共同研究『政治的人間の比較研究』の成果の一部である。